テキトー生徒会

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テキトー生徒会

【Ｎコード】
Ｎ４５８２Ｐ

【作者名】
紅の雲雀

【あらすじ】
白桜高校。
この学校の生徒会のお話。
美人で面倒くさがりな生徒会長。
しっかり者の副会長。
そんな二人（仮）の物語。

雑談で始まり溜息で終わる生徒会

「ふぅ～、それにして面倒くさいわね～。家に帰ってモ〇ハンの続きがしたい～」
「会長、我慢してくださ。俺だって家帰ってゆっくりしたいですよ」
「じゃあ、今日の生徒会なしでいいよ！　はい！　終了！　かいさ～ん！」
「いやいや！　ダメですよ会長！　今日は大切な放送があるんですから！　新しい生徒会役員の募集のための！」
「いいよ～そんなもの。この私とアンタが入れば、この学園の管理なんて楽勝よ」
「……って言ってもほとんど俺がやってますけどね……」
「何か言った？」
「いいえ、何も」
「あ、会長。お茶飲みます？」
「あ、うん。ちょ～だい」
「了解です……ってあれ？　ビデオの電源が入ってる。しかも録画……ちょっと会長！　会長の録画ボタン押したんですか！？」
「いや～面白そうだったから……」
「会長！　これ生放送ですよ！」
「げっ……」
「ハァ……」
「まあ、気を取り直して。ゴホンッ。あ～あ～テステス。えーと生徒会長になった水無月奏です。ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところに来なさい。以上」
「会長！　某ハ〇ヒさんみたいなこと言わないでください！　っていうか、本気にしないでくださいね！　普通の人も受け付けてますからね！」

「まあ、冗談だよ。生徒会はこの学校をよくしたいと考えてる人も考えてない人も募集してるよ」
「いやいや、基本はよくしたいと思ってる人を募集してるからね」
「ちなみに私個人の希望だと個性的な子がいいな」
「個性的な子ですか？」
「右手が幻想殺しって言う手で、もの凄く不幸な人とか」
「ここは学園都市じゃないですよ？　そしてそれは個性なんですか？」
「体が丸くて、色が青、よくタヌキと間違われる。猫型ロボットも募集してるよ～」
「してません！」
「大丈夫、ここにはの○た君級の馬鹿がいるから」
「会長！　それって俺のことですか！？」
「あ、そうそう言い忘れてた……」
「？」
「モン○ンが強い人来て。そして私の手伝って～」
「そっちかよ！」
「そろそろ冗談はやめて……生徒会役員を募集してるから、よかったら生徒会に入ってね。以上」
「よろしくお願いします」

「ふ～疲れたね～」
「もしかして最初のほうから放送してたかな？」
「まあまあ、そういうのは気にしない方向で」
「ですね。これで生徒会役員になりたい人が来たら嬉しいですね」
「うん」
「では、次こそお茶飲みましょう……って録画切れてないですよ！」
「また～？」
「今消しましたよ……最悪だ……」
「これで来るのかな？」

「来ないに一票です……」
「私も……」
「「ハァ……」」

自己紹介で始まり説教で終わる生徒会

俺の名前は瀬川睦月です。
無月学園の2年生で。
一応この無月学園生徒会の副会長。
副会長って言っても会長と俺しかいないから自動的に俺は副会長。
「ね～お茶入れて～」
この人がこの学園の会長、水無月奏さん。
俺は会長って呼んでる。
容姿端麗・学業優秀・運動神経抜群。
この上ないくらいの美少女だけど。
物凄い面倒くさがりや。
「ハイハイ……」
俺は椅子から立ち上がりお茶を入れる。
「これでいいですか？」
「ん。ありがとう」
会長は勉強の参考書を読んでる。
流石成績上位者。
「会長。今日って雑務だけですか？」
「う～ん、他にもあったような気がするけど……めんどいからなし！」
「は～い……」
……この人が会長で大丈夫か？
「あ、そうそう。新入生のための部活紹介だけど、例年通り各部が部活の紹介でいいよね？」
「はい、では明日に部長たちに言っておきますね」
「ねえ、モ〇ハン部って創っていいかな？」
「多分ダメだと思います……っていうか多分じゃなくてもダメだと思います」

「え～ケチ～」
「俺に言わないくださいよ。言うなら学園長に」
「えぇ～～あのババァに～。嫌だよ。絶っっっっ対反対される！」
「当たり前ですよ」
「あの人固すぎるんだよ。何？　頭石で出来てるの？　いや、それともダイヤ？」
「まあ、確かにあの人は頭が固すぎますね」
でもどの学園長や校長もモン〇ン部は反対するでしょう……。
「じゃあさ、試験召喚システムをこの学園にも導入しよ」
「どこの文〇学園ですか！？　ってか予算的に無理でしょう」
「いや、学力向上のために～、って言えばババァも動くんじゃない？」
「どこか無理があるかと……」
「え～本当にケチだな～」
ケチなんじゃなくて現実的に無理ですよ……。
「じゃあ学科増やそう」
「僕たちの力で学科増やせます？」
「大丈夫だよ」
ちなみにこの学校は普通科。
「戦士とかナイトとか増やそ」
「学園モノですか！？」
「ちなみに私の学科はヒロインね」
「俺は普通科で……」
「種族はヒューマンで！」
「ヒューマン以外の選択肢がないです」
ツッコムのも疲れてきた……。
「でもやっぱり学園都市みたいに特別なカリキュラム受けたいね！」
「この学園に物凄く不幸な人とかシスターさんがいたらですね～」
「目指せレベル５！」
「俺はレベル３で十分です」

「一方〇行を超えろ！」
「どんな能力ですか！？」
「目標青髪ピアス！」
「ランク落ちてないっすか！？」
「上〇さんに説教されたいね」
「多分熱血なバトルを繰り広げそうですね」
「で、何話してったっけ？」
「まずはそこからですか……」
「えーとたしか……ババァの頭が固いって話だっけ？」
「その前に〇ンハン部の話ですね」
「そうだよ！　思い立ったら即行動！」
「何本気でモンハ〇部申請書書いてるんですか！？」
「じゃあ申請してくる！」
「って、ちょ！」
速い……物凄い足が速い……。
って行動するのは速過ぎですよ……。

その後会長は学園長にお説教されましたとさ。
めでたし、めでたし。

部活紹介に始まり口喧嘩で終わる生徒会

「えーと、新入生のみなさん、おはようございます。生徒会副会長の瀬川です。今日は部活紹介をします」
何故会長がいないから俺が司会進行をする。
「では野球部お願いします」
「はいっ！　野球部です！　野球部では――――――」
野球部……サッカー部と順調に紹介が進んだ。
「では吹奏楽部お願いします」
「はい、吹奏楽部です。吹奏楽部では――――――」
文化部の紹介も順調に進むと思った。
けど現実はそう甘くないらしい。
「〇ンハン部です」
「ってちょっと会長！　何やってるんですか！　その前にその服なんですか！？」
「これ？　これは防具よ」
あ、これは片手剣ね。と会長が言った。
「いやいや、貴女は何を狩りに行くんですか！？　そもそもこの世界にモンスターはいないですよ！」
「じゃあ人の心に潜む悪を……」
「ハンター通り越してヒーローですか！？」
「まあまあ、落ち着いて。回復薬でも飲む？」
「どこで買ったんですか！」
「おばちゃんから買った。これくらいハンターの嗜みだよ」
「あの～……会長？　マジで狩に行くんですか？」
「うん、えーと、弓道部の山本くんと剣道部の高橋さんと狩に行くんだよ」
「なんとな～く何の武器を使うから分かります……」
「あと狩人のおじさんも誘うつもり」

「山で熊とか猪とか猟銃で撃ってそうですね」
「な、ななんと！　今モンハ〇部に入ると装備を一式プレゼントします」
「かいちょ～、さっきから話が噛み合ってませ～ん」
「大丈夫、Gのやつも引き継げるから」
「モ〇ハン部ってゲームですか？　それとも本当に狩るんですか？」
「本当の話。ここで紹介して本当に部活創ってあのババァを見返すんだ！」
「もしかして最終的に学園長を狩るとか言いませんよね？」
「それは私の気分次第」
「わ～怖い」
「それとね、さっき言った狩人のおじさん。あの人、昔に人を危めた事があるたしいよ……」
「本当に怖いですね！」
本当に現実は面倒くさい。
で、本当に会長は何をしたいんだろう？
そしてこの場に来てはいけない人が来てしまった。
「葵さん！」
「ババァ！！」
「学園長にむかってババァとは何ですか！」
「老けてるやつにむかってババァって言っちゃいけないのか！」
「会長！　乙女がそんな言葉遣いはダメですよ！」
「ババァババァ言うけど私はまだ３５歳です！」
「だったらその眉間にあるシワをどうにかするんだなババァ！」
「会長！　俺の話を無視しないでください！」
「まだケツが青いガキンチョが！」
「クサレババァ！」
「「……」」
「傷つくなら二人とも黙ってればいいのに……」
「と、とにかく早くこのふざけた紹介をやめなさい！」

「ふざけたとは何よ！　このクソババァ！」
「十分ふざけてますよ、会長……」
「睦月は黙ってて！」
「会長も黙ってください！」
もう新入生が何をしたらいいのか混乱してるし……。
「学園長と会長のケンカは後でゆっくり他の場所でしてください」
一応仕切って一時的にケンカ止めさせて。
「すみませんでした、会長が暴れてしまって。えーと、一年生は各自のクラスへ戻ってください」
新入生をクラスへ戻させる。
この人たちどうしようか？
教頭先生にでも言ってこの二人を怒ってもらおうか。

この後、９時ぐらいまで口喧嘩が続いた……らしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4582p/

テキトー生徒会

2010年12月14日15時25分発行